

副詞「そろそろ」による 出来事成立時期の描写 ——時間性とモダリティの交差——

ルチラ パリハワダナ

要 旨

「そろそろ」に関する従来の研究はその時間的な側面を取り上げるものが多いが、本稿では時間性とモダリティの相関の仕方に着目した。「そろそろ」は出来事成立時期への近づきを描写するのみならず、成立に向かって近づいていく含蓄的な過程も含意する。「そろそろ」の時間性と文のモダリティの相互作用により、含意される時間的な推移と共に出来事実現の必然性や当為性も増していき、出来事成立の頃合いの時期に到達し、成立時期が近づいていることが表現される。

更に、本稿では、「そろそろ」の諸用法を手掛かりにしながら、動作の様態を表す用法から始まり、抽象化しながら時間的な意味に派生し、頃合い判断・当為性判断を表す用法に至った「そろそろ」の意味派生の過程についても考察した。

【キーワード】「そろそろ」、当為性、頃合い、含蓄性、意味派生

1. はじめに

従来の研究における意味記述によれば、副詞「そろそろ」は出来事成立時を描写しながら、開始の時期が徐々に近づいている様子を表す。例えば、以下の例1の「そろそろ」は、出来事「来る」の成立時期が近づいていることを表しているものと見做すことができる。

- (1) 「ただいま。ケーキ買って来たよ」と伸子は部屋へ上がって、「お父ちゃんとお母ちゃんは？」
「うん、そろそろ来ると思うけど」 (女社長)

上記の例の「そろそろ」は「いつ来るか」ということの表現であり、出来事成立の時期を局限している。故に、本稿では「そろそろ」を時間副詞として扱う⁽¹⁾。

しかし、「そろそろ」による出来事成立の描写は時間的な性質のみ有するものではないと考えられる。「そろそろ」は例1のように三人称主体の行為に対する予想を表す文にのみならず、次の例2のように、制御可能な意志的行為の実現に対する動作主自身（＝話し手）の判断を表す文にも共起可能で、その際に表される意味が当為性判断と相互作用しているからである。つまり、後者の

場合は単に成立時期が近づいていることを出来事描写的に述べるのではないと考えられる。

(2) 「そろそろ帰りましょうか」

(点)

では「そろそろ」は、時間的な用法以外にいかなる用法を有するのだろうか。時間的な用法以外の用法は文の述語の表すモダリティのタイプとどのように関連するのか。本稿では、時間性、すなわちアスペクチュアリティと、陳述性、すなわちモダリティの関連関係に着目しつつ、1) 「そろそろ」の諸用法を分析し、2) 成立時期への近づきを表す用法からモダリティを表す用法までの意味派生の過程を明らかにする。

本研究のデータとして小説38冊、随筆集1冊、シナリオ集1冊、新聞8ヶ月分から採集した327例を対象とした。文体的偏りを少なくし、現代語を代表するサンプルを抽出することを目的に様々なジャンルからのデータを研究対象に含めた。なお、対象とした例の出典については論文末に掲載する。

以下において、先ず従来の研究を概観した上で、「そろそろ」が文に現れるための基本条件や「そろそろ」の一般的な特徴について考察する。次に、「そろそろ」の諸用法を手掛かりにしつつ、様態用法からモダリティ用法への意味派生の過程について分析を行う。

2. 従来の研究

「そろそろ」の表す成立時期は従来の研究において徐々に近づいてきたもの、または直前に迫ったものとして記述されている。

森田(1989)において「動詞および、時間的観念を伴う名詞に係って、その行動の開始やその事柄の成立する時間に現在ゆっくりとさし掛かってきたことを表す。身体的動作の動詞に係っても、動作のスピードののろさを表すのではなく、行動開始の時期に徐々に近づいてきたさまを表すのである。(p.613)」と指摘されている。

一方、テンス・アスペクトとの関連の仕方を基準に時間副詞の分類を行っている西原(1991)では、アスペクトと関連する副詞として位置付けられ、時の前後関係の一つである「直前」を表す語として、「いよいよ」「いまにも」「さっそく」「間もなく」などと共に分類されている。

それに対して、国立国語研究所編『分類語彙表(増補改訂版)』(2004)では意味的類似性により重点が置かれ、「ぼつぼつ」「ぼちぼち」と共に未来を表す語として位置付けられている⁽²⁾。

森田(1989)において指摘されているように、「そろそろ」には時間に関わる用法以外に「行動や状況が静かにゆっくりと移行するさまを形容する(p.613)」用法がある。飛田(2002)でも同用法は「進行の速度を遅く静かにする様子を表す」ものとして記述されている。

川瀬(2001)は「そろそろ」の歴史的変遷に着目し、上述の動きの様態を表す用法は中世から見られるのに対して、事態発生に近いことを表す用法は近世後期になって現れていることを指摘している。前者は状態変化の進展を表すためにも用いられるようになり、それと共に時間的な見方が発達した結果、後者の用法が派生し、勢力を増していき、現代語においては中心的な用法となったと述べている。

上述した先行研究が示している通り、現代語の「そろそろ」はその中心的用法において出来事成立時期が近づいていることを表す。故に、「さっき」や「今」と異なり、「そろそろ」の表す意味は単なる時間軸上の二時点の順序関係ではないと言える。「近づき」である以上、成立直前までの過程も含意しながら、その到達点⁽³⁾も表現しなければならないからである。

3. <近づき>の前提条件——「そろそろ」の共起制限と特徴——

本節で先ず「そろそろ」が修飾する出来事的基本的特徴と共起制限について簡単に触れた上で、「そろそろ」の表す<近づき>について考察する。

3.1 述語のタイプとアスペクト的制限

「そろそろ」は原則的に未完了の出来事を描写する⁽⁴⁾。但し、開始しかかった出来事も描写可能である。未完了であるという条件を満たせば、動詞述語（例3）のみならず、出来事性を有した名詞述語（例4）、または状態変化を表す動詞「なる」などを伴った形容詞述語（例5）の文に共起可能である⁽⁵⁾。

- (3) 「そろそろでかけるわ、おじいさま」と孫娘が言った。 (世界)
- (4) 「そうか……ふむ、ふむ。そろそろ、太詰だな」 (剣客)
- (5) 加藤は階段を登り切って、彼の部屋の障子を開けた。男の体臭がぶんと鼻をついた。そろそろ暑くなるというのに、宮村は部屋を閉め切って歌を歌っていたのに違いない。 (孤高)

出来事が開始しかかったことを表す場合、次のように「～てくる」「～はじめる」「～だす」「～かける」などの開始を表す補助動詞や「～ようになる」と頻繁に共起する。

- (6) 戦意高揚歌ではないが、何だか景気づけの歌ばかりが耳にはいる。そろそろテレビの歌番組もつまらなくなってきたようだ。 (風)
- (7) 頼芸は、そろそろ暗示にかかりはじめた。 (放浪記)

上記の場合も、出来事は開始しかかってはいるが、成立はしていない。その成立（例6の場合、完全に「飽きてしまう」こと、例7の場合は完全に「暗示にかかってしまう」こと）が近づいていることが「そろそろ」によって表されていると言える。

3.2 描写される出来事に対する制限

出来事の成立が近づいているという判断を話し手が下すので、問題の出来事は意志によって制御可能なもの（話し手が制御可能であると信じているまたは望んでいるものを含む（例8）、あるいは予想（例9）・観察（例10）可能なものでなければならない。故に、不意に起きる出来事とは共起できないと考えられる。

- (8) 「わしもそろそろ、花を咲かせたい」 (国盗り)
- (9) そろそろ、あの背中一面に刺青を入れた取り立て屋が、令子の部屋を訪れる頃かもしれない、

いやもうとっくに部屋に上がり込んで、令子を脅かしつづけているかもしれないと思うと、
いてもたってもいられない気持ちになりました。(錦繡)

- (10) 腕時計のデジタル数字はそろそろ真夜中の十二時が近づいていることを示していた。
(世界)

更に、「そろそろ」は原則的に肯定と呼応する。否定表現との共起は、「～なければならない」などの当為表現や「なくなる」などの状態変化に限定され、打消しの意味を直接描写することはできない。

出来事成立時期への近づきを表すためにはその近づきの観察点としての基準時とその基準時に接近していく時間的過程という二つの意味要素が必要である。以下において、それぞれについて考察する。

3.3 「そろそろ」の基準時

時間副詞の中に副詞「いつも」のように基準時の設定が行われないものもあるが、基準時を設定しその時点からみた時間的な見方を表現するものもある。「そろそろ」は基準時をとり、その時点を経時的視点にしつつ、出来事成立時期が接近していることを表す。設定される基準時は非過去形述語の場合、例 11 のように発話時であるが、過去形述語を取る文の場合、発話時に先行する時点となり得る。しかし後者においても、次の例 12 が示しているように基準時における開始を描写対象としている点には変わりがない。「そろそろ」は非過去形の文に現れることが多いので、発話時を基準時とすることが最も一般的であると言える。

- (11) 「そろそろ行くか？」と侯爵が不自然な音程の声でいった。(聖少女)
(12) いままで登って来た、夏山登山道はそろそろ暗くなりかけていた。(孤高)

以上示した基準時が時間的観察点となり、その時点において成立時期が近づいていることが表される。

3.4 成立時期までの含蓄的な過程

<近づき>であるためには、最低限二次点の比較が必要である。しかし、「そろそろ」の場合は基準時と比較される時間的過程の開始時点は明示的に述べられない。基準時に向かって時間的に推移してきた過程が含意されるのみである。このように「そろそろ」は基準時において成立が近づいていることを表しながら、成立直前の時点にのみ焦点を当てるのではなく、基準時以前から徐々に接近してきた過程をも含意する。

では、その過程はいかなる性質を有したものなのだろうか。その過程の性質について次の例を基に考察する。

- (13) ——選手として引退を意識したのはいつか
「このときってのはないけど、自分の中で、もうそろそろかなと。肉体的な衰えはもちろんあるが、気持ちの上でも、そろそろだろう、と」(産経 2007.9.19)

上記の例の場合「引退」が描写対象となっている。「いつか引退しなければならない時期が来る」ことは話し手の潜在的意識の中に以前からあったと考えられるが、「肉体的衰え」や「気力の低下」などの何らかの言外のきっかけにより、話し手が問題の「引退」が迫ってきていると判断したと言える。文の表す判断、予想・観察の根拠は出来事の開始の確認などによって得られるものではない。その根拠も判断に至った過程も文中に明示されてはいない。その過程はあくまでも話し手の意識の中に含蓄的に捉えられたものである。従って、「そろそろ」の表す近づき過程は含蓄的な推移として捉えることができる。

そのことは以下のように「そろそろ」が含蓄の「も」と頻繁に共起することからも窺われる。

(14)「私もそろそろ介護を受ける年になりました」と冗談めかして語りが、肌のつやは66歳と思えないほど若々しい。(読売 2006.4.3)

(15)「それにしても、ほんとにお久しぶりね、十五年ぶりくらいかしら。伊木さんも、そろそろ中年紳士のお仲間入りね」(植物群)

高橋(1978)は「含蓄をこめた文の主題提示」用法の「も」のカテゴリーとして「推移主体の感動的な提示」及び「マークしている時期がせまってくることをあらわす」場合を立て、それぞれの例として「もう紅葉もおしまひになるわ。」及び「もはや消燈時間もせまってきたので」を挙げている(pp.25-29)。いずれの文にも「もうそろそろ紅葉もおしまいになる」及び「そろそろ消燈時間も迫ってきた」という風に「そろそろ」を伴わせることができる。「そろそろ」も成立時期への接近過程を含蓄的に表すので、このように含蓄の「も」と頻繁に共起し、お互いに強化し合うと考えることができる。

なお、上記の例13が示しているように「そろそろ」は成立時期への近づきを表し、成立時点そのものへの到達を表すのではないので、成立時期をばかして表現するためにも用いられる。

以上、「そろそろ」の表す近づき過程が含蓄的なものであることを示した。以下において、「そろそろ」の諸用法を考察しながら、それらがいかなる意味派生の体系を成すか見ていきたいと思う。

4. 「そろそろ」の諸用法を通して見た意味派生の過程

まず、次の図1が示している通り「そろそろ」は予告・予想、判断、意志、願望、勧誘、命令などの多くのモダリティ形式を取る動詞述語文と共起し、出来事の成立時期を局限する。

本節では、「そろそろ」の表す意味と文の述語の特徴の二つに着目しながら、「そろそろ」の用法を1) 動作の様態を表す用法、2) 到達点への接近を表す用法、3) 成立時期への近づきを表す用法、4) 成立時期が近づいていることの判断を表す用法、5) 当為性モダリティを表す用法に分類し、以下において考察していく。

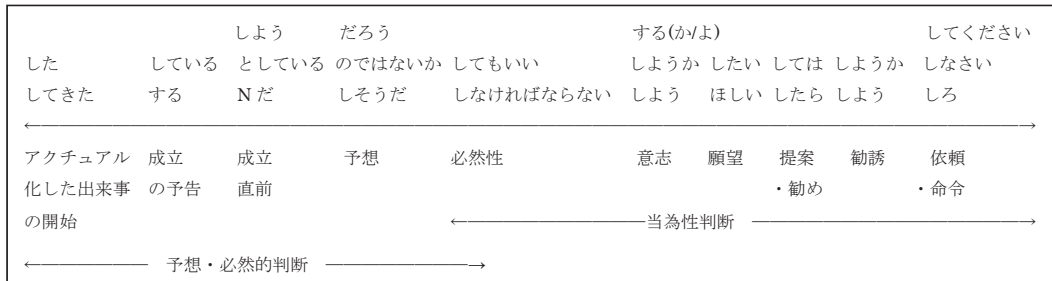


図1 「そろそろ」が共起する動詞述語文の述語形式

4.1 動作の様態を表す用法

上にも述べたように森田(1989)はこの用法を「行動や状況が静かにゆっくりと移行するさまを形容する(p.613)」ものとして説明している。以下の例で考察してみよう⁽⁶⁾。

(16) 能見八郎兵衛が杖を頼りにそろそろと歩き出した。

(佐伯泰英著『極意』, 2003, 913)

(17) 呼びながら、結城はそろそろと歩き始めた。

(金田えびな著『恋人の値段』, 2001, 913)

この用法の「そろそろ」は動詞述語文に現れながら、動詞を様態副詞的に修飾し、移動のゆっくりとした推移そのものに焦点を当てる。動作の様態を表す表現であるため、副詞語尾「と」の現れが必須である。上述したように中世から用いられているこの用法は「そろそろ」の最も古い用法であることが川瀬(2001)において指摘されている。

4.2 到達点への近づきを表す用法

上述の動作のゆっくりとした推移を表す用法から意味が派生し、到達点に徐々に近づいていく用法が生じたと考えられる。更に、近づいたもの及びその到達点は具体的なものから徐々に抽象化していったと推察される。下記の例18にその名残を見ることができる。

(18) 戦後の高度成長期に大量に整備された社会資本がそろそろ耐用年数に近づき、更新時期を迎え始めた。
(読売 2006.8.7)

この例は抽象化されたものであり、時間的な近づきを表すものであるが、一方で、到達点としての「対応年数」に近づいていった過程を描く描写方法を取っている。

到達点への具体的な近づきを表す場合に「そろそろ」という風に現れていた副詞語尾「と」は、意味の抽象化と共に消失していったと考えられる。従って、到達点への近づきを表す用法は動作の様態を表す用法と時間的な近づきを表す用法の連続性を示す証として捉えられる。抽象化していった結果、出来事成立時期への近づきを表す時間的意味が派生し、時間副詞として成立したと考えることができる。

4.3 成立時期への近づきを表す用法

以上見てきたように、「そろそろ」の意味は、動詞文において具体的な近づきから抽象化され、

抽象的な近づき、そこから更に派生し、時間的な近づきを表すようになる。

「そろそろ」は次の例 19～21 のように必然的時間経過を表す文にも共起することができる。この場合ある時間への近づきを話し手が観察するものとして表現される。必然的時間経過を表すこのような文に現れた場合、出来事成立時期への近づきを表現する。

- (19) 今朝は、家族を上野駅で見送ってから、出勤して来たので、そろそろ十一時になろうとしている。 (女社長)
- (20) サラリーマンになってそろそろ一年になるという時期だった。 (新宿)
- (21) 腕時計のデジタル数字はそろそろ真夜中の十二時が近づいていることを示していた。 (世界)

4.4 成立時期が近づいていることの判断を表す用法

意味派生が更に進んだ結果、ある時期が近づいているという判断を表現するために用いられるようになり、下記の例 22、23 のように名詞文にも使われるようになる。

- (22) 六月三日 雨、そろそろ梅雨か (二十歳)
- (23) そろそろお中元シーズンだ。今回は、贈り物にもおすすめの冷たいお菓子を紹介しよう。 (読売 2006.6.15)

上記の例 22 では「雨が降っている」ことを根拠に話し手は「梅雨が近づいている」という判断を下し、その近づきを描写するために「そろそろ」を用いている。例 23 では周期的な到来が問題となっている。毎年の「お中元シーズン」への近づきは経験や常識に基づいて判断可能である。あるいは、デパートの特設コーナーの現れや贈り物用の商品のテレビコマーシャル等の言外の何らかのきっかけがその到来を告げてくれる場合もある。例 23 では判断の根拠は文中に明示されていないが、「そろそろ」は「お中元シーズンが近づいている」という判断の一部を成すと考えることができる。

一方、「だろう」「～のではないか」や将然態の「～しそうだ」といった推量表現を伴う予想を表す文に共起した場合、「そろそろ」は出来事成立時期が近づいていることを表現しながら、文の表す推量的判断と相関する。

- (24) その日は、もうそろそろ仕事が終りそうだと目途のついた頃から、取材先の方が八方手を尽して手配して下さった結果、たった一枚だけ残っていたというグリーン車の切符が手に入った。 (アップル)
- (25) 海の蒼さと山肌のつよさのあいだに蕎麦の白い花が風にゆれていた。もう、そろそろ、鴈が南下してくる頃だろうか、と行助は空に目を移して考えた。 (冬)
- (26) 「ここ数試合では一番いい感じで振っていた。そろそろ出るんじゃないか」。岡田監督も、4月7日を最後に途切れている本塁打への期待も口にした。 (読売 2006.5.12)

以上の例が示している通り、予想は出来事の成立時期に対するものであり、その時が近づいているものとして描かれる。「そろそろ」が共起する予想表現には、例 24 のような必然的な判断に基づいた予想もあれば、推量的判断に基づいたものや希望的観測に近い例 26 のようなものもある⁽⁷⁾。

後者は後述する頃合い判断との連続性を示唆している。

上記の例 23 が表すような客観的な根拠に基づいた事実判断から、出来事の成立に相応しい時期が近づき・到来していることを表す判断にも「そろそろ」の用法が拡大していく。このタイプの判断を本稿では頃合い判断と呼ぶ。以下のような場合である。

- (27) そんなワケで、私の表参道ヒルズの散歩は、日本酒に始まりワインに終わる。頭の中がスロープのようにグルグルグル回り始めたら、そろそろ帰り時というサインなのだ。

(読売 2006.6.13)

例 27 では「そろそろ帰り時」という表現によって帰宅するのに相応しい時間が近づいていることが表されている。すなわち、帰宅するのに頃合いのいい時期が到来していることの表現なのである。その根拠は「頭の中がスロープのようにグルグルグル回り始めたら」という条件文によって示されている。

「そろそろ」が頻繁に現れる頃合いを表す名詞述語文の述語名詞を次のように分類することができる。

a. 単独で頃合いの意味を表す名詞

このタイプの名詞として「～頃」「～時間」「～時期」「～季節」「～時」「～時刻」「～時分」などが挙げられる。例 28、29 のように周期的な時間を表す場合もあれば、一回切りの個別具体的な出来事の時間を問題にする場合もある（例 30）。この用法の「そろそろ」は出来事がいつ成立してもいい時期に迫っていることを表しながら、頃合い判断を強化すると言える。

- (28) 「そろそろ寝る頃だな」 (冬)

- (29) 「もう、そろそろ店の終る時刻だ。京子くん、今夜は一緒に帰ろうじゃないか。痴漢になるより、やはり合意の上の人間関係のほうがいい」 (植物群)

- (30) 「そろそろ時間だな。……これで帰るよ」 (冬)

b. 「～の／なシーズン」、「～の／な季節」

- (31) さて、そろそろ梅雨のシーズン。 (読売 2006.6.13)

- (32) そろそろ大雪や路面凍結が心配な季節。冬のドライブに向けた備えは万全にしたい。 (読売 2005.12.4)

上記の「シーズン」「季節」に最も相応しい時期（「旬」）という意味が含まれており、その時期の到来、または始まりを表す。同様な「旬」の意味が「～頃」「～（の）時期」「～時」などにも含まれている。但し、上記の例が示している通り、「そろそろ」の描写対象は望ましさの有無に対して中立的であり、必ずしも望ましい出来事でなければならないわけではない。

c. 「～頃」を含む複合語

このタイプに含まれるものとして「見頃」、「飲み頃」、「食い頃」、「煮頃」、「売り時」、「売れ頃」、「似合い頃」「年頃」⁽⁸⁾などが挙げられる。これらの複合語は成立の頃合いを表すが、例 34 のよう

に最盛期に向かっていき、それに近づいている様子を描く場合もある。

(33) ……藍さまって珍しく優しい子だった。もうそろそろお嫁さんになる年頃でしょう。

(楡家)

(34) そろそろ紅葉も見ごろ。

(読売 2006.11.17)

d. 「～時」を含む複合語

このタイプに含まれる名詞に「帰り時」、「納め時」、「切り上げ時」、「潮時」などがある。これらの名詞述語文は出来事の終わり、打ち切りの頃合いを表す。

(35) 二人でのんびりチップのやりとりをしているうちに午前二時になった。そろそろ切り上げどきかもしれなかった。

(夏)

(36) 「そろそろ潮時か」。そんな思いも頭をよぎる。年老いた両親も娘の帰国を望んでいる。

(読売 2006.11.27)

なお、「そろそろ」は単独でも終わりや打ち切りを表現するために用いられることがある。その打ち切りは新たな事態の成立を意味する場合もあるが、次の例 37 が示している通り、同様な文脈情報に必ずしも依存してはいない。

(37) もちろん、ブームが続く可能性もあるが、「そろそろ」ということも考えておきたい。

(読売 2005.12.2)

同様に単独でも出来事の成立のための頃合いの時期が到来しているという判断を表現することができる。次の例 38 では「そろそろ」が単独で現れているが、「買い時」の到来を意味していると判断できる。

(38) 投資を始めて、意外と悩むのが売り時なんですよ。買うのは「よし」「そろそろ」と思って行動に移せても、しばらくウォッチしていくうちに、「このまま置いていていいのか?」「売ったりして動かしたほうがいいのか」などと悩む人は多いものです。

(読売 2006.3.31)

上述した単独用法から「そろそろ」は判断の一部を構成していることが窺われる。

以上見てきた頃合い表現は当該出来事の開始または終了に相応しい時期が到来していること、あるいは過程を有し、時間的に推移してきた出来事とその最盛期を迎えていることなどを表現する。一方、「そろそろ」は出来事の開始に迫っていき、その直前であることを表す。モダリティとの相関によって、実現の頃合いが高まっていく過程が含意され、そのピークに到達し、実現を間近に控えていることが描写される。両者はお互いの意味を強め合いながら、出来事実現の頃合いがピークに達し、実現の頃合いの時期を迎えていることを表すと考えることができる。故に「そろそろ」は上述した頃合い表現と頻繁に現れるのである。以上見てきたように、「そろそろ」の表現意図に実現が迫っていることのみならず、当該行為の行うべき頃合いの時期が到来していることも含まれている。

なお、「そろそろ」は当為性を持たない本節で取り上げた予想・判断を表す文に現れる場合、認

識のモダリティと相関する。その場合、出来事実現の近づきを単に話し手が予想するものとして、あるいは実現に近づきつつある必然的な出来事を話し手が観察するものとして描かれる。一方、後述する出来事実現の当為性判断を表す場合、意志、命令、勧誘などの述語文と共起し、その述語の表す当為性モダリティと相関する。

4.5 当為性モダリティ用法

上記の図1において「当為性判断」を表すものとして記した種々の表現の出来事には制御可能であるという共通点がある。「そろそろ」は上記のような出来事を表す文に共起した場合、モダリティの当為性判断と相関する。述語の動作を「すべきである」という当為性判断と関わり合いながら、行為を行うべき時間が近づいていることを表す。

(39) それから一カ月が過ぎている。こちらに金に関する相談事がなくとも、そろそろ会わなくてはいけない時期になっていた。(夏)

(40) 「赤兵衛、そろそろ火を焚け」(国盗り)

上記の例39、40の「そろそろ」は単に当該の行為を行うべき時期が近づいていることを表現するのではないと考えられる。以前から実現が予定、または意識されていた出来事が描写対象となっている。「そろそろ」は含蓄的に含意される成立時期までの時間的過程を描きながら、その到達点としての成立直前の時期に焦点を置く⁽⁹⁾。一方、モダリティ形式の当為判断(例39)及び命令(例40)によって出来事を行う必然性、すなわち当為性が表現されている。述語の当為性判断と「そろそろ」の描く成立直前までの時間的過程の相互作用により、行為実現に対する当為性がピークに向かって高まっていった過程が描かれる。その結果、行為を行うべき頃合いの時期が到来し、実現に近づいていることが表される。

上述したような出来事実現に対する当為性判断が典型的に表現されるのは「～なければ／なけりゃ／なきゃ／ねば(ならない／ならぬ／いけない)」「～なくては／なくちゃ(ならない)」「～ておかないと(いけない)」といった当為・必然のモダリティ形式と共起した場合である。更に、命令(例40)、依頼(例41)、意志(例42)、勧誘(例43)、提案・勧め(例44)の場合も文のモダリティと相関しながら、当為性判断を表すことが以下の例から窺える。

(41) 黄ヘッドコーチは「周りも『そろそろ何とかしてくれよ』という雰囲気だった」と笑った。(読売 2005.12.26)

(42) ひとしきり笑うと、さてそろそろ始めるか、と呟いて立ち上がり、サンドバッグの前で着替えはじめた。(夏)

(43) 「そろそろ同窓会をやるうという話がもちあがっているが」(冬)

(44) (じゃあ、そろそろ、休んだら?) (孤高)

同様に「～でもいい」との共起の場合も頃合いの意味が表現される。奥田(1996)では、「～でもいい」の一つの意味として「当然そうすべきであると、話し手が聞き手に文の行為を要求して期待している」ことが挙げられている(p.144-145)。その用法における当為性と「そろそろ」の表す基準時において成立が迫っているという意味の結合により当為性の意味が強化されると判断可能である。

- (45) 「優勝を争うには、彼の復調が不可欠。最後まで信頼して、出します」。もう5月。そろそろ“冬眠”から覚めてもいい。 (読売 2006.5.4)

森田 (1989) では「行動開始の時間に徐々に近づいてきたさまを表す」場合「もう」と共に用いられることや「じゃ」「では」「それじゃ」などの開始の合図の呼び掛け語と共に用いられることが多いという指摘があるが、上記の例 42 の「さて」も同様な働きをしていると言える。

なお、上述した頃合い判断の場合と同様に、当為性判断は常に肯定的なものでなければならぬわけではない。中立的または否定的なものもあり得ることが以下の例で明らかになる。事柄そのものが望ましいものであっても、そうでなくてもその行為を行うべき時期があってもいいからである。

- (46) 「まあ、いいだろう。私のいた席を譲ってあげよう。私もそろそろあの世に行かねばならない時分だ。」 (冬)

上述した述語の行為を行う当為性の拡大過程の含意は述語のモダリティと「そろそろ」の表すアスペクチュアルな意味の結合によって生じるが、「そろそろ」は単独でも当為性の意味を獲得していることが次の例 47 のように言い淀み用法で当該行為を促すために用いられることから窺われる⁽¹⁰⁾。この例では促されている行為、すなわち「同意してください」または「同意書にサインしてください」といった表現が省略されているが、「そろそろ」の現れにより行為要求効果が発揮されていると見做すことができる。

- (47) その後、主治医は面談の求めにも応じなくなり、当直の若い医師が「人工呼吸器のことで、そろそろ……」と同意を求めてきた。「当直医に立ち話でできる話じゃない」と反発した。 (読売 2006.8.22)

更に、述語の表す当為性判断が「そろそろ」の行為要求効果と相まって、次の例 48 のように、「いい加減」に近い意味を表す場合がある。とうにきている、行為を行うべき時期に対する聞き手の気付きを喚起する用法であり、行為を行うべき時期がむしろ過ぎているという意味に近い。「もう」の共起がこの意味を更に強めている。

- (48) 「辰次、もうそろそろ引退しろよ」とか、「おまえの心臓はトーチカ心臓か」などという声が周囲で聞かれた。 (楡家)

以上、本節では「そろそろ」が文のモダリティとどのように相関するのかを見てきた。必然的な判断、当為性判断のいずれの場合も成立に向かって推移する含蓄的な過程が描かれ、その到達点としての成立直前が描写される。上述したように表現の焦点は推移過程の到達点としての成立直前にある。しかし、推移してきた過程が含蓄的に表現されるので、到達点までの時間量も表現される。このことは「そろそろ」が副詞「もう」と頻繁に共起することからも窺える。

- (49) あれから一週間……もうそろそろ、搜索願が出されてもいい頃である。 (砂)

- (50) 私はじっと父のうしろ姿を見ました。そして、もうそろそろお仕事をひかえられたらどうかと言ってみました。 (錦繡)

(51) 「ママどうしたの、ティナ」と聞くと、

「ママはね、まだお勤めから帰って来ないの。もうそろそろなんだけど。レストランで働いているんだけど、日によって遅くなるの」と答えた。(数学)

(52) 「もうそろそろ自称飛行家が来る頃じゃない」(放浪記)

「もう」が時間量を表す副詞「しばらく」「少し」などと共起する場合「元々の量に加えて更に」という意味を表現する。「もうそろそろ」の場合も成立時期の直前であるという想定が話し手（例 50 の場合は話し手と聞き手）の中にあつたにも拘わらず、基準時においてもなお出来事が成立していないことを表す。例 49 及び 50 の場合は、例 48 の場合と同様に、「もっと早く搜索願が出されていても良かった」あるいは「大分長く無理をしてきた」という風に成立までの長さが表現意図となっている。一方、例 51 及び 52 では成立を待っていたことやそれに時間がかかっていることを含意しながらも、直前に近づいていることに焦点が置かれている。

「もうそろそろ」は例 49 や 50 のように当為性判断を表す文にも、例 51、52 のように推量・必然的判断を表す文にも共起可能であり、「そろそろ」と非常に頻繁に共起する。本論の対象としているデータでは 327 例中の 28 例（8.56%）の「そろそろ」が「もうそろそろ」の形で「もう」と共起していた。

5. 終わりに

以上本稿では、出来事成立時期が近づいているというアスペクチュアルな側面と出来事成立の必然性・当為性が高まり、頃合いの時期が到来しているというモダリティ的な側面が副詞「そろそろ」を介してどのように交差するのかを考察してきた。更に、「そろそろ」の含意する含蓄的過程がこのような相互作用をもたらしていることも示した。故に、「そろそろ」は時間副詞でありながら、陳述的でもある。

時間の副詞的表現の中にもっぱら時間的意味のみを表現する副詞は少ない。「やっと」や「ついに」はもとより、「すぐに」や「やがて」なども出来事の成立に対する話し手の捉え方を描写する。成立時期をダイクティックな手段により表現する時間副詞（「今」「さっき」など）は時間性が高いが、成立時期を不定時期として表現する副詞類（「そのうち」「いつか」）、あるいはばかして表現する副詞（「そろそろ」）になるとモーダルな性格が強くなる。また、時間副詞の中に時間的な概念と共に量・頻度、速度、勢いといった概念（「しばらく」「時々」「急速に」「どんどん」など）を表現するものがある。それらの概念や突発性（「突然」）、漸次性（「だんだん」）と言った概念は話し手の捉え方を介して表現されるものであるので、これらもモーダルな性格を有する。更に、基準時における成立の有無を問題にする「もう」「まだ」も話し手の想定を基準にした判断を表現する。以上取り挙げた諸表現から窺えるように、文の時間的側面とモーダルな側面が副詞を介してどのように相互作用するのか体系的に捉えることが可能であるが、その詳細な検討を今後の課題とさせて頂く。

更に、本稿では「ぼつぼつ」や「ぼちぼち」などの意味的類似性を有した他の副詞との比較検討もできなかった。これらを分析する際に、方言・位相としての側面にも注目する必要があるが、

その綿密な検討も今後に残された課題である。

注

- (1) 後述するが、本論では時間副詞の中にテンス・アスペクトとのみならず、モダリティとも関連するものがあるという立場を取る。時間副詞としての成立過程についても後述する。
- (2) 初版には時間を表す「そろそろ」について言及が見られない。
- (3) 副詞「いよいよ」も焦点の局面に近づいていく時間的過程を含意することができ、含意される過程のクライマックスを表すと考えられる。両者の区別を明示するためここで出来事成立時点を「到達点」として捉え、「そろそろ」はその到達点への近づきを描写するものと考ええる。なお、「いよいよ」は出来事成立の近づきのみならず、「いよいよ死体の発見された現場を見せた」(点)のように過去形述語と共起し、焦点の局面への到達を表すことが可能な点、「君もいよいよ高校生」(太郎物語)のように状態変化を意味する名詞述語と共起し得る点、「風はいよいよ強くなった」のように事態の進行の度合拡大を表す用法を持つ点で「そろそろ」と異なる。
- (4) 「二人の確執もそろそろ終わりに近づいたようだ」(飛田 2002、下線は筆者)のように過去形述語と共起する例も見られるが、その場合も「近づく」のように語彙的意味においてこれからの発展を意味するものなどの何らかの未完了を表す意味を持つものが多い。
- (5) 述語そのものが開始を表さなくても、述語の出来事の成立が、他の出来事の開始の意味を含んでいれば、完了を表すタ形述語と共起可能である。(例：さあ、そろそろ時間が来ました。神楽坂に夜店を出しに行く。(放浪記))
- (6) 筆者の採集したデータの中に動作の様態を表す用法の例は含まれていなかったもので、例 16、17 は国立国語研究所現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) より引用した。
検索対象：そろそろ、頻度：2,911、「そろそろ歩く」の頻度：3
<http://nlb.ninjal.ac.jp/headword/AV.00152/#SS117>
- (7) この例ではホームランが出ることに対する予想が描写されている。
- (8) 他の複合語と異なり、「年頃」「似合い頃」は様々な事態を限定し、「その事態に相応しい年齢」「その事態の似合う年齢」といった意味を表すことができる。
- (9) 焦点が到達点に置かれても、その点に至る過程を含蓄的に表現する点において「そろそろ」は「間もなく」と異なる。
- (10) 但し、この場合も文脈情報に依存している。

用例出典

(あすなろ)：『あすなろ物語』、(雨)：『黒い雨』、(美しき村)：『風立ちぬ・美しき村』、(王様)：『パニッ
ク・裸の王様』、(女社長)：『女社長に乾杯！』、(風)：『風に吹かれて』、(錦繡)：『錦繡』、(草)：『草の花』、
(国盗り)：『国盗り物語』、(恋人)：『エディプスの恋人』、(孤高)：『孤高の人』、(琴)：『ビルマの竖琴』、
(さぶ)：『さぶ』、(塩狩峠)：『塩狩峠』、(死者)：『死者の奢り・飼育』、(忍ぶ)：『忍ぶ川』、(少女)：『聖
少女』、(人生論ノート)：『人生論ノート』、(植物群)：『砂の上の植物群』、(新橋)：『新橋烏森口青春篇』、
(数学)：『若き数学者のアメリカ』、(砂)：『砂の女』、(世界)：『世界の終りとハードボイルド・ワンダー
ランド』、(戦艦)：『戦艦武蔵』、(小さき者)：『小さき者へ・生れ出づる悩み』、(沈黙)：『沈黙』、(点)：
『点と線』、(夏)：『一瞬の夏』、(檜家)：『檜家のんびと』、(野菊)：『野菊の墓』、(二十歳)：『二十歳の
原点』、(花埋み)：『花埋み』、(冬)：『冬の旅』、(ブン)：『ブンとフン』、(放浪記)：『放浪記』、(モオツァ
ルト)：『モオツァルト・無常という事』、(雪国)：『雪国』、(檸檬)：『檸檬』以上『新潮文庫 100 冊 (CD-ROM
版)』に収録されている作品、その他：(アップル)：『誕生日のアップルパイ』文藝春秋、(中学)：『NHK
中学生日記シナリオ集 坂道の二人』近代文芸社、(読売)：『読売新聞 (2005 年 12 月 1 日～2006 年 7 月
31 日)』、部分的収集：(産経)：『産経新聞』

参考文献

- (1) 阿刀田稔子他編 (1998)『擬音語擬態語使い方辞典 (第2版)』創拓社
- (2) 奥田靖雄 (1996)「現実・可能・必然 (中) —— 「している」と「してもいい」 ——」『ことばの科学 7』 pp.137-174, むぎ書房
- (3) 川瀬卓 (2011)「副詞『そろそろ』の史的変遷」『語文研究』 112, pp.93-78, 九州大学国語国文学会
- (4) 川端善明 (1964a)「時の副詞 (上)」『國語國文』 第33巻第11号, pp.1-23.
- (5) 川端善明 (1964b)「時の副詞 (下) —— 述語の層について その一 ——」『國語國文』 第33巻第12号, pp.34-54.
- (6) 金水敏, 工藤真由美他 (2000)『時・否定と取り立て』岩波書店
- (7) 工藤浩 (1985)「日本語の文の時間表現」『言語生活』 6月号, pp.48-56, 筑摩書房
- (8) 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- (9) 国立国語研究所編 (2004)『分類語彙表』(増補改訂版)大日本図書株式会社
- (10) 高橋太郎 (1978)「『も』によるとりたて形の記述的研究」『国立国語研究所報告 62』 pp.1-52, 国立国語研究所
- (11) 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- (12) 西原鈴子 (1991)「副詞の意味機能」『副詞の意味と用法』国立国語研究所
- (13) 仁田義雄 (2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- (14) 日本語記述文法研究会 (2003)『現代日本語文法 4 モダリティ』くろしお出版
- (15) 飛田良文・浅田秀子 (2002)『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- (16) 南不二男 (1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- (17) 森田良行 (1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- (18) 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000)『モダリティ』岩波書店
- (19) ルチラ パリハワダナ (2011)「副詞「いよいよ」を通して見た出来事成立に対する話し手の捉え方」『京都大学国際交流センター論攷』 1号, pp.45-63, 京都大学国際交流センター
- (20) Palmer, F.R., 1986 Mood and Modality, Cambridge University Press.

謝辞

本稿をまとめるに当たり、東京外国大学名誉教授工藤浩先生に数々の貴重なご教示を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

(京都大学国際交流センター・教授)

Approaching Event Actualizing Time Expressed by the Japanese Adverb *Sorosoro* : A Correlation of Temporal and Modal Features

Ruchira Palihawadana

Abstract

This paper reveals how the Japanese temporal adverb *sorosoro* modifies the time of event actualization. It expresses that the actualization time is closely approaching, thereby implying an underlying temporal progression towards the actualization. This progression is not only temporal, but also implicative, frequently enforced by co-appearing focus particle *mo* which triggers similar connotations. Along with the implied temporal progression, the necessity to carry out the action increases gradually, peaking at a given criterion time. Thus, *sorosoro* expresses the notion that the time is ripe for an event to occur by temporally indicating its approaching actualization, while modally denoting the necessity to carry it out.

Furthermore, this paper illustrates the derivative process of *sorosoro*'s meaning as one originating from a mimetic expression of gradual movement. First, it acquires a temporal meaning through semantic abstraction. Then through expanded usages in nominal sentences, it goes on to acquire its modal meanings of judgement and necessity. Since it is often used to express the judgement that the time is suitable for an event to occur, it frequently appears with nominal expressions such as *koro* (just the right time) or *kisetsu* (season), which have connotations of 'temporal suitability'.

(Professor, The International Center, The Organization for the Promotion of International Relations,
Kyoto University)